

【釈文】

猶以、るす中万事二
 心ヲ付可給候、但^(堀尾)馬へ
 申、久敷神門・出東
 方々ふしん二ほねおり
 満足申候、兵部も無事二
 能つめ申候間、可心安候、
 頓而帰し可申候、
 かん齋・六^(山崎)郎左衛門二も
 心へ可給候

此比者状二而も
 不申候、其元別条
 無之候哉、当御地

御静謐二

両^(家)上^(家)様御機嫌能

被為御座成候、

日光へ公方様御

社参被為遊御供

被仰付、明十一日二

我等も江戸ヲ立候、

頓而帰候者、仕合

能御暇可被下候間、

帰城可申候、当年者

惣国きゝんと申候

間、其元万事二心

ヲ被付、仕置之義

存寄儀少も心お

かれす可被申聞候、

来^(會)年者大かた御ふ

しん被^(會)仰付義可

有候間、家中之者共

手まへ不成候由、少も

おごり仕間敷旨

かたく可被申聞候、

謹言

出羽

卯月十一日 直(花押)

大橋茂右衛門殿

堀尾但馬殿

①

【読み下し】

猶^{なほ}以て、^{（前略）}るす中万事に心を付け給うべく候、但馬へ申し、久しく神門・出東方々ふしん^{（昔時）}にほね^{（折）}おり、満足申し候、兵部も無事によくつめ申し候間、心安かるべく候、頓て

歸し申すべく候、かん齋・六郎左衛門にも心え給うべく候

此比は状にても申さず候、其元別条これなく候哉、当御地御静謐に両上様御機嫌よく御座ならせられ候、日光へ公方様御社参あそばせらる御供仰せ付けられ、明十一日に我等も江戸を立ち候、頓て歸り候はば、仕合よく御暇下さるべく候間、帰城申すべく候、当年は惣国ききんと申し候間、其元万事に心を付けられ、仕置の義存じ寄る儀少しも心おかれず申し聞かるべく候、来年は大かた御ふしん^{（昔時）}仰せ付けらる義有るべく候間、家中の者共手まえ成らず候由、少もおごりつかまつるまじき旨かたく申し聞かるべく候、謹言

出羽

卯月十一日

直(花押)

大橋茂右衛門殿

堀尾但馬殿

※読みやすくするために一部の漢字をひらがなにあらためた。

【現代語訳】

近頃は書状も送らずにありました。そちらは何事もないでしょうか。こちらは静謐で二人の上様も御機嫌よくいらつしやいます。日光へ公方様が社参なされる御供を命じられ、明日十一日に私も江戸を出発します。やがて（江戸に）帰ってきたならば、順当に（国元への）御いとまがいただけるでしょうから、（松江に）帰城します。今年は全国的飢饉ということです。そこで、そちらで万事に心を配られ、仕置については考えつくことは少しも遠慮せずに命じて下さい。来年はおそらく普請を命じられることがあるでしょうから、家中の侍たちが窮乏しているそうですが、少しも贅沢しないように厳しく命じて下さい。謹言。

出羽

四月十一日

直(花押)

大橋茂右衛門殿

堀尾但馬殿

追伸、留守中は万事に心を配っていただきたく思います。但馬に言ったことですが、長らく神門郡・出東郡の方々で普請に尽力していること、満足に思います。兵部も無事に詰めていますので、安心して下さい。やがてそちらへ帰します。かん齋・川崎六郎左衛門にもよろしくお伝え下さい。